

## 反骨の教育家 評伝 長崎太郎 II

### A Critical Biography of NAGASAKI Taro (Part II)

関口安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

#### 三 菊池寛の退学事件

##### 新資料の出現

長崎太郎の第一高等学校時代の最大の事件は、同級生菊池寛の退学事件、いわゆるマント事件にあったといつてよいだろう。彼は事件に巻き込まれ、苦悩する。長崎太郎の名が文献上一番多く確認できるのも、この事件に關してなのである。早く菊池寛は「半自叙伝」に、長崎の名も出して自身の一高退学事件のことを書いた。また彼の小説「青木の出京」(『中央公論』一九一八・一二)は、自身の退学事件に取材したものである。

菊池寛の伝記作者は皆、右の資料に依拠し、別の角度からの考察を怠っていた。早くは鈴木氏亨『菊池寛伝』(実業之日本社、一九三七・三)にはじまり、村松梢風『芥川と菊池』(文藝春秋新社、一九五六・

五)永井龍男『菊池寛』(時事通信社、一九六一・八)、それに金子勝昭『菊池寛の時代』(たいまつ社、一九七九・一、異版に『歴史としての文藝春秋 増補「菊池寛の時代」あり)、さらには、生誕百年記念出版を銘打つた高松市立図書館編集の『菊池寛伝』(高松市立図書館、一九八八・一)に至るまで、すべてこの域を抜け出していない。杉森久英の『小説菊池寛』(中央公論社、一九八七・一〇)では、シーモアという英語教師の出席代返事件が真の退学理由という世良田進の説まで紹介するものの、本筋は「半自叙伝」を出るものではない。ただ、近年片山宏行が著した『菊池寛の航跡 初期文学精神の展開』(和泉書院、一九九七・九)は、新資料を吸収して書かれたもので、他の諸本とは一線を画す。

私は『評伝成瀬正一』(日本エディタースクール出版部、一九九四・八)においてこの事件を扱った時、一等資料ともいえる当時の成瀬正一

の日記（「成瀬日記」と命名した）と、長崎太郎側の資料を用いた。

「成瀬日記」は事実の先後関係から揺れ動く菊池寛の気持ちや回りの人々の対応を、実にくわしく伝える。また長崎太郎側の資料とは、

「菊池君の退学」（警察大学校校友会誌『致遠』第9号、一九五二・六）と「吾が友菊池寛」（山口アララギ会『なき』一九五六・二）の二つである。

ところで、その後長崎太郎の一高時代の日記が、ご遺族の長崎陽吉氏宅で発見された。これを「長崎日記」と呼ぶことにするが、そこには菊池寛が退学事件の際に、長崎に宛てて出した手紙まで添付されている。マント事件の決定的資料がここに出現したことになる。『評伝成瀬正一』には、その一部を用いた。ここでは「長崎日記」をはじめとする長崎側の資料を出来るだけ出して、菊池寛の退学事件と長崎太郎のかかわりを、わかりやすく述べることにはしたい。

菊池寛の退学事件の大筋は、以下のようだ。一九一三（大正三）年四月のある日、菊池寛の親友佐野文夫が、当時日本女子大学の学生であった倉田艶子（のちに『出家とその弟子』を書く倉田百三の妹）とデートの約束をした。佐野は当時一高生のシンボルと見なされたマントを着て行きたいと思った。が、自分の質に入れてしまったので、隣の一年生の部屋から身丈に合ったものを黙って身に着け、外出した。佐野は長男として甘やかされて育ったところがあり、見え坊であった。

それから二日ほどたって、佐野も菊池も金がなくなったので、そのマントを質に入れようということになり、菊池がマントを着て質屋に行った。菊池はそれが他人のものとは知らなかったのである。

その夜、成瀬正一とトランプをしている菊池のもとに、舎監の谷山初七郎からの呼び出しがあり、菊池はマントが盗品であったことを

知る。彼は佐野から事情を聞こうとしたが、佐野はたまたま山口県から上京した人を案内して、東京見物に出かけていて、留守だった。そこで菊池寛は、自分が盗んだということにして寮務室を出た。その夜遅く帰ってきた佐野文夫に問い詰めると、佐野は声をあげて泣き出す。父や親戚に知らせることはできないのであった。

ここで佐野文夫のプロフィールを、簡略に書き留めておこう。佐野文夫は一八九二（明治二五）年四月十八日の生まれ。本籍は群馬県の前橋市であるが、中学校は父の勤務地の山口県立山口中学校であった。父は図書館学者として知られた佐野友三郎である。当時、彼は山口県立図書館長の職に就いていた。友三郎は東大を卒業直前に退学し、米沢・大分・広島などの中学校教諭を経て、一九〇〇（明治三三）年に秋田県立図書館長となった。秋田では巡回文庫の普及に尽力し、山口県立図書館に異動してからは、児童室の設置、十進分類法の採用、開架式の主張などで知られた。その活発な運営ぶりには、全国図書館のモデルとして注目された。

日本の公立図書館の歴史は、佐野友三郎をはずして語ることはできない。また、彼は熱心なクリスチャンであり、自身の子どもたちを教会の日曜学校に通わせていた。文夫も父の勧めで、幼い頃は日曜学校に何度か通ったものの、長続きはしなかった。文夫はずでにふれたように、りりしい容貌にめぐまれ、鋭い頭脳の持ち主であった。『第一高等学校校友会雑誌』第二二七号（一九一三・六・一五）には、「神の発見の過程」という若々しい感性あふれる論を載せていた。だが、佐野文夫は、その容貌や頭脳からは想像できない、精神的弱さをかかえていた。菊池寛からマントのことを質されて彼は青くなり、泣き出してしまふ。事態の深刻さがわかったからである。模

範学生として無試験検定で入学した一高を、いま自分が不名誉な事件で追われると、山口県立図書館長という公職にある父も、連座しなければならぬ。そのことを思うと、彼は泣くほかなかったのである。事情を知った菊池は、泣きしきる佐野を引き立てて寮務室へ行き、釈明してもらおう氣を失った。菊池寛はそういう氣の弱い佐野がいとしかつたのである。親分肌の菊池寛は佐野をかばおうと決心する。

当時二人は、同性愛の關係にあつた。菊池は佐野がかわゆくてならなかつたのである。そして佐野の代わりに、一高を退学する羽目になつてしまふ。大学に行きたくても、生活費や授業料の目当てもなく、自暴自棄に陥つていたことも、菊池が佐野の身代わりとなる一要因であつた。

多くの級友が菊池寛の退学に関する事情を知るには、時間がかかつた。なにせ佐野の優美な外見は、彼に原因があるのを隠すのに役立つていた。それに彼の本質も決して悪人ではなく、他の級友同様、若者としての純なやわらかな心ももつていた。佐野は自分ばかりか菊池寛をも救いたいと思つていたので、何かと奔走した。その姿が菊池のため動いていると、はたから見られたのも無理はない。

「成瀬日記」によると、成瀬正一が「私は菊池が学校をやめて、佐野が国へ帰つた事情を詳しく知つた」と日記に書くのは、「菊池は退学するかも知れないと言つて私共を驚かした」と四月十六日に書いてから、何と二か月後のことである。

#### 長崎太郎の視点から

さて、ここで長崎太郎に視点を据えて、菊池寛の退学事件に新た

な光を当てることにする。長崎は二年生の時、南寮にいたこともあり、菊池と佐野という好対照の二人の性格をよく知つていた。南寮の連中は、芥川龍之介や井川恭や藤岡蔵六のいる中寮と異なり、出鱈目な生活を送る者が多かつた。学費が届くと、みんなよく飲み食いに出かけ、門限に遅れることもしばしばであつた。

ザンダーのドイツ語辞典や夜具が、いつの間にか姿を消し、質屋に行つていたり、羽織りや袴や制服などを共有して用いたこともあつたという。それは熱心なクリスチャンの長崎には、耐えられないことであつたようだ。結局彼は寮の編成替えの時、芥川や井川のいる中寮に移るのだが、その頃の菊池・佐野・長崎をめぐるエピソードを長崎の「菊池君の退学」から引用しよう。

その夜（注、長崎が後藤隆之助から中寮へ移れと忠告された夜）十時頃であつたか、菊池君は「佐野がいなくなつた」と慌て氣味に私に話しに来た。二人は、寮内で佐野君を探し求めた。菊池君は、佐野君の身の上に何か起こつたことを感じたのであろう、頗る不安そうな顔付きをしていた。それは、秋もようやく深くなつた頃であつた。図書館やその他心当たりに行つてみたが、佐野君の姿は見当たらない。十一時頃、真つ青な顔をして震えている佐野君を連れて、菊池君は部屋に帰つて来た。三人は二階の寢室に上がつて行つた。「俺は俺の生活を改めようと思う。中寮に移るのは止めてくれ。俺は洗礼のつもりで水風呂を浴びていたのだ。」これが佐野君の言葉であつた。私は、友人佐野を悪人と思うことは出来ない。しかし、私はその後決心して、中寮に転室した。

これは菊池の佐野への異常な愛（同性愛）を語り、佐野が決して根っからの悪人ではないことを示すエピソードである。二人の間の同性愛を見抜いていた成瀬正一は、「日記」に、「菊池の様に自我を抑へて佐野の前に屈服したら面白味もあるまい」（一九二二・五・二四）という辛辣な批評を書いている。

「長崎日記」には、マント事件寸前の菊池寛と佐野文夫の状況がしばしば記されている。長崎太郎と菊池・佐野のかかわりがわかるので、以下に引用しよう。まずは一九二三（大正三）年一月四日の記録である。

夕方散歩に出て学校の側で菊池君と佐野君とに出逢つた。菊池君が何か包を手に携けて居た。前とは変らぬ生活をやつて居る事だらうか。いつまでも自分の二人に対する態度は変へぬつもりだ。自分は二人に対して変らぬあたゝかき思を抱いて居る。おそらく菊池君も佐野君も自分に対して嘗て語つた言葉をわすれて居りはすまい。然し今晚二人に出逢つた時何だか一種いとはしい様な気がしきりに胸に浮んで来た。

菊池と佐野の暮らす南寮から離れて、長崎は二人を客観的に見ている。そしてそこに存在する危機感を、それとなく感じているのである。いま一つは、同年二月八日付の記録に見出せるものだ。

佐野君に大学の裏門で逢つた。自分は別に何も話すつもりではなかつたが、佐野君は此の頃の健康状態に就て先づ口をきつて下宿の事や何かしきりに話した。思ふ様に勉強が出来て

ない。誰も自分のうちへは遊びに来ぬ。然し少しも淋しい事はない。運動は絶へず不足勝ちだとひと通りの話がすんで、自分は此の頃佐野君の身上に起つた二つの出来事に就て聞かされた。例の様に幾分狂的な性質を此の節は遺憾なく發揮せられて居る様子だ。寒い夜に小刀など持つてかけまはるなど、大分危険な所がある。市川君も多分困らされた事だらう。佐野君と父上との間に起つた問題。初めて聞いて少なからず驚いた。然しそれ程の父上のご心配も決して無理ではない。南寮の生活、それから惹いて興つた佐野君の生活には、なる程同君の父上にある程までのご決心をなさしめた理由は十分ある。

佐野君は自分に対してよく勉強する様にと終りに注意してくれた。それから遊びに時々行かうと約して分れた。

佐野君に対してなした忠告を佐野君は心をかたむけて聞いてくれた。自分は今佐野君より受けた忠告を十分に心の底にたゝみこんで置かねばならぬ。あの寒い夜に佐野君は新しく受ける洗礼だと云つて、つめたい水をかぶられたではないか。自分はそんな「な」真似は出来ぬが十分心を空ふして此の言葉を聞き入れよう。よろこんで感謝して。

佐野文夫は、菊池寛を退学に追い込んだ事件（マント事件）を起こすべくして起こしたのである。菊池にもスキがあつた。事件は、この二か月後に起こつたのである。

菊池寛が退学を決心したころ、長崎太郎は井川恭や藤岡蔵六らと小石川上富坂に建つた日独学館に起床していた。一高の学寮を離れてからは、菊池や佐野とも教室以外では顔を合わせる機会は少なく

なっており、依然寮に止まっていた成瀬正一ら寮生活組が、いちはやく菊池寛が退学するかも知れないという情報を得ていたのに対し、当初長崎太郎は何も知らなかった。ただ形影相添うようにいつも佐野と一緒にいた菊池寛の姿が、教室から消えたのが不思議だった。初めは病気かと思っていたが、いつになっても姿を現さないもので、物理教室の前で佐野に出くわした時、その消息を尋ねた。

長崎の「菊池君の退学」には、その時佐野が沈痛な面持ちで、「菊池は破廉恥なことをしたので、とうとう退学になった」と言い、移転先の下宿の住所も教えなかったとある。

ところが、長崎太郎はある夜、菊池寛の突然の訪問を受け、菊池自身から真相を告げられる。長崎のエッセイ「菊池君の退学」からその箇所を引用する。

すると、ある夜、上富坂の寄宿舎（注、日独学館）に私を訪ねて来た者があった。菊池君であった。玄関に出て見ると、同君は沈痛な顔をして、相変わらずの汚い服装をしたまゝ立っていた。私が「上がつてくれ」と言おうとする前に、同君は「ちよつと出てくれないか」と促した。私は、彼の後からついて行った。二人は無言で歩いた。菊池君は、下駄を引きずるように歩を運んだ。暗い道を相当歩いたと思う時、二人は神社やお寺かと思われる境内に来た。「座つてくれないか。」私は石の上に腰をおろした。「誓言してくれないか、誰にも話さない」と。「誓言する、誰にも話さない。」私は反射的に答えた。

「俺は、人間のうちで誰か一人に、この真実を知っておいて貰いたいと思う、その一人に君を選んだ。すべての人が俺を泥

棒と呼んでも、俺が泥棒でなかったことを君一人には知っておいて貰いたいのだ。俺が佐野を愛していることは、君の知っている通りだ。俺の顔を見て、人は泥棒だと思いかも知れないが、佐野を見ては、泥棒と思う者はあるまい。俺の学資は到底続かぬ。佐野は秀才だ。俺は、佐野のために犠牲になった。その事実を君に話しておく。」

菊池君は、佐野のために平生から氣遣っていたことや、この度の事件の顛末を、詳しく話して聞かせた。（中略）

「佐野は、君を破廉恥漢と言ったよ。」菊池君は、黙して答えなかった。

「よく分かった。」これが、私の最後の言葉であった。夜更けて、上富坂の寄宿舎に帰ったが、その夜は眠られなかった。

長崎太郎は右の文章とほぼ同様のことを、「吾が友菊池寛」にも書いている。その方は小著『評伝成瀬正一』に引用したので、ここには「菊池君の退学」の方を紹介した。菊池がクラスで最も若い長崎太郎に事件の真相を告げたのは、長崎の純情で、誠実、しかも熱烈なキリスト者という日頃の評判に与かっていたのであろう。

「長崎日記」によれば、物理教室の前で、佐野に菊池寛の近況を聞いたのは、一九一三年（大正二年）四月二十三日である。その五日後の四月二十八日の「長崎日記」には、「今朝新渡戸先生の御宅へ参らうと思つたが、先生の方に何か御用事があられるとかで、明日九時頃と云ふ事になつた」とあり、新渡戸への直訴の決意が記されている。また「早く此の事件を円満に解決したい、滅び行く友の霊

を救つて一人でも真の神の道を歩む友を多く作りたい。友よ友よ自分はいつまでも君等を愛する、君等と別れる時に 誓つた言葉を僕はいつまでもいつまでも忘れぬであらう。友よ、滅び行く友よ、僕はどうしても此のまゝ君等の歩をたゞ見て居るわけにはゆかぬ 友よ 僕は君から生涯敵視されることがあるかも知れぬ、たとへそんな事になつても僕は決して何とも思はぬ」とある。すると「菊池君の退学」に書かれた「ある夜」は、一九一三（大正二）年四月二十三日から二十八日までの「ある夜」ということになる。

なお、菊池寛は後年「半自叙伝」で事件を振り返り、「僕と同じクラスに長崎と云ふ男がゐた。たしかクリスチャンだつたと思ふが、純情な男で、僕が学校をよしたと知ると、僕を訪ねて来て、その退学の事情を訊いてくれた。僕は、長崎にだけは、本当の事情を話した」とある。長崎太郎の回想は二つとも、菊池が長崎をわざわざ上富坂の日独学館を訪ねて来たことになっているのに、「半自叙伝」では、逆になつていて、長崎が「僕を訪ねて来て、その退学の事情を訊いてくれた」とあるのだ。事実はいまとなつては決めがたいものの、長崎の二つの文章は、かなりリアルに日独学館を訪ねてきた菊池寛の悄然とした姿を書きどめており、その真实性は否定し難い。こんにち一読者として双方の文献を比較すると、軍配は長崎太郎に上がる。菊池としては、自分から進んで事件の真相を長崎に語ったとは、「半自叙伝」には書けなかつたのであろう。

菊池寛の告白を聴いて、長崎太郎は悩みに悩む。「菊池君の退学」には、その間の事情が語られている。彼は佐野を体育の時間につかまえ、校庭の隅に連れて行き、問い詰めた。が、佐野は「菊池が、破廉恥をやつたんだよ。何度言つても同じことだ」と言い張り、さつ

さで行つてしまい、反省の色もない。菊池の犠牲が何のためにもなつていないことを知つた長崎太郎は、二人の友のために何とかしなければとの思いに駆られる。

若き長崎太郎の正義感が噴出する。このままでは菊池も佐野もダメになる。菊池の犠牲は佐野文夫を救うことにはならない。何とかして二人を生かす道はないかと彼は思い悩む。菊池の汚名は今晴らさなければ永遠に消すことはできなくなる。他方、佐野の盗癖も直すことができなくなる。彼は菊池の払つた犠牲を思うと居ても起つてもいられない。彼は菊池との約束、——「誰にも話さない」との誓言を破つても、行動に移ることを決意する。

長崎太郎は同じ日独学館に寄宿している親友の井川恭に、この決意の可否を問うている。井川の冷静な判断は、「君の思つた通りのことをやる以外はあるまい」というものであつた。長崎はまず舎監の谷山初七郎を寮務室に訪問し、破廉恥の汚名で処分された菊池は、決して破廉恥漢ではない。本人の自白だけでなく証拠があるかどうか、今一度調査してほしいと願つた。が、谷山は「成瀬日記」などからも察せられるのだが、一筋縄ではいかぬ人物であつた。すでに慎重に調査の上決定した処分なので、もはや動かし難いと言つて、長崎を軽くあしらう。そして再度の面会の際には、「もしそんなことを主張すると、更にいま一人の犯人を出さねばならぬだろう」とまで言う始末であつた。困惑した長崎太郎は、最後の手段として信頼する校長新渡戸稲造を訪ね、相談することを決意する。以下長崎の「菊池君の退学」から関係箇所を引用する。

小石川の、校長宅の門をくゞつた時、私の心は安らかであつ

た。早速面会を許して下さった先生の前で、私は静かに友人両君との交友の由来を述べ、両君の性格、能力等を詳細に説いて、今回の事件の顛末を詳しく説明し、菊池君の汚名を晴らし、佐野君に反省の機会を与え、しかも両君を救って頂きたい、その方法は先生におまかせする、と懇願した。

私は、その時の先生の御温顔を忘れることは出来ない。先生は眼鏡の底でしばらく目をつぶっておられたが、やがて「よしよし、よく君の意思は解った。私にまかせて貰いたい。適當の処置を講じようから」というお話だった。私は喜び勇んで、先生のお宅を辞した。

ところが、ことは簡単には進まなかつた。新渡戸校長はすでに一高を去るという事態にあつたのである。後任には文部省の視学官瀬戸虎記が決まつていた。長崎は校長交替劇の中で菊池の退学事件がうやむやにされるのを恐れ、卒業試験の前日の六月十一日、牛込若松町の瀬戸新校長の家を夜、訪問し、事のなりゆきを再度ていねいに語り、善処してくれるよう要望した。長崎としてはやむにやまれぬ行為だったのである。

若き長崎太郎は、情熱に燃えた純な男だった。それは菊池寛には嫌われた行為となるのだが、そこには二人の友人を思う心があつた。彼は菊池の冤罪を訴えたばかりか、佐野に關しても反省の色が見えた時には、もはや試験は受けられないものの卒業証書を出してほしいと懇願している。瀬戸虎記は成瀬正一の「成瀬日記」の中で、「瀬戸先生は真面目な、軽薄のないよい人」と評されているように、長崎の話に誠実に耳を傾け、善処を約束した。六月十二日の「長崎

日記」には、以下のようにある。

久しく自分の頭をなやました問題は昨日解決した。此の間自分が成した事、自分の愛する二人の友に對する態度などは只天なる父の、みそなはし給ふ処である。誰が知らう。自分は少しも恥じぬ。自分の取つた処には確に手落ちはあつたらう。然し自分は出来るだけの事を成したつもりだ。愛する友よ。僕は君等によりて長くうらまれてもかまふ事はない。君等によりて後々のろはれても何とも思はぬ。僕は友として出来るだけの事を君等につくした。僕は此の後も變ることなく、友よ、二人の友よ。君等を愛する事であらう。僕は切に思ふ、君等の前に地獄の火がよし燃える時も、僕の手は君等の手に延べられる事であらう。此の心、切ない、苦しい僕の心が君等によりては永久に解せられない事もあり得る事だと思ふ。然し此の僕の心を君等が解してくれる日の一日も早からん事を僕は切に祈り願ふ。

君等と再び相会して此の胸の中を語る事が出来たら嗚呼佐野君、僕は君を待つて居たのに、只一語君に語りたかつたのに。君は終に僕に逢つてくれなかつた。佐野君、僕の心は終に君に全く通ぜずに終る事となつた。寮務室の数時間、嗚呼唯だ上にありて知り給ふ者の外は、誰が此を知らうぞ。

長崎の悲壯な懇願もあつて、菊池寛は再度呼び出され、学校側の調査を受けたが、前言を翻さなかつた。そのため彼は卒業寸前に一高を退学しなくてはならなくなる。

菊池寛は「半自叙伝」に、「長崎が話したことに依つて、僕の事

情はずつかり、一高の当事者に分つてしまつたのである。その年の五月に新渡戸校長は、関係して居られた「実業之日本」へ「前科者一高を志願す」と云ふ題で、それとは分らないやうに僕のことを書いてゐられた。それは僕に対して、同情のある書き方であつた。さう云ふ事情が分つたので、一高では再調査と云ふことになつて、僕は再び一高へ呼び出されたのである。だが、僕はむろん、前言を翻すやうなことは卑怯なことだと思つたので、あくまで自分だと云つた」と書いてある。ここで菊池寛のいう新渡戸の「前科者一高を志願す」は、「一高の入学を志望した感心な前科者」（『実業之日本』一九一三・五）のことと思われる。菊池も言うように一読「それとは分らないやうに」書かれてゐるが、暗にマント事件を意識してゐるのである。

菊池の窮状を救つたのは、成瀬正一であつた。菊池の退学を知つた彼は、菊池に深く同情した。成瀬は芝区白金三光町の自分の家へ菊池を連れて行き、父に頼んで書生部屋に住まわせることにした。菊池と同じ香川県の出身である彼の父は、華族銀行と言われた大銀行、十五銀行の頭取をしており、これまでも郷里の有為な青年を何かと世話をしてゐた。成瀬家には、いつも何人かの書生が寄食をしてゐたため、菊池一人を引き受けても何ともなかつたのである。以後菊池寛は、成瀬一家の世話になり、この年九月、京都帝国大学文科大学の英文科選科にまず入り、翌年一高で卒業検定試験を受けて合格し、本科に転じることとなる。くわしくは、小著『評伝成瀬正一』（日本エディタースクール出版部、一九九四・八）を参照して頂ければ幸いである。

#### 佐野文夫のその後

長崎太郎の名が現在文献上最も多く確認できるのは、菊池寛の一高退学事件であるとは、前節で触れたところだ。近年になつて長崎太郎の故郷、高知県安芸市の家から事件当時の菊池寛や佐野文夫の太郎宛書簡が出現し、菊池寛の一高退学事件と事件の後日談がより鮮明となつた感がある。そこで長崎太郎の青春を彩る菊池と佐野をめぐる事件の結末を、新資料に依拠しつつ、今少し語ることにしよう。

長崎太郎が谷山舎監や新渡戸・瀬戸両校長に、事実を語るため直訴したというのを聞いた菊池寛は、「俺の犠牲を君が無にしたのだ」との詰問のがきを数度長崎宛てに送ることになる。中には「佐野は自殺するであろう」と書いたものもあつた。そうこうするうちに、佐野の父友三郎が上京して佐野のありかをつきとめ、山口に連れ帰ることになる。長崎は佐野父子を新橋駅に見送つてゐる。愛する佐野が遠くに去つたことを知つた菊池は、長崎に激烈な抗議の手紙を出す。

この時菊池が出した手紙が発見され、現在ご遺族の長崎陽吉氏が保管されている。わたしは幸い、いち早く実物を見ることができた。一通は墨書で、比較的読みやすい字で書かれた便り（一九一三・六・一二付）である。「小石川上富坂町二十三 シュレーデル方 長崎太郎殿」とある。そこには、「君の爲めに僕等は非常なる悲境に陥つた。僕は数個の大損失を得た。佐野の父は上京し彼は進退窮まつて居る。／僕は君の親切を長く痛切に恨む。君は誰よりも怖い僕等の破壊者であつた、僕は君から何事をもき、たくない。僕は君の動機を考へることが出来ないほど苦しがつて居る。今后も過去に於



ける友情の記念の爲めに僕等の事に一指も触れてくれるな」と書かれていた。

いま一通は、大学ノート用紙にペン書きした長い便り（一九二二・七・六付）である。夏休みで帰省中の高知県安芸町の長崎の家に送り届けたものである。正確には「土佐安藝郡安藝町長崎太郎様」宛、差出人は「東京にて H・K生」となっている。あまりうまくない、なぐり書きのような書体で、後に行けば行くほど文字は乱れている。私信ではあるが、すでに時効とも判断されるので、ご遺族の長崎陽吉氏の許可を得て、わたしはすでに前稿「研究余滴 芥川龍之介周辺の人々①長崎太郎論（上）」（『都留文科大学研究紀要』第43集、一九九五・九）に、その前半を紹介した。ここには長くなるが、あえてその全文を掲げる。

長崎よ、

俺は君の手紙を見て又腹がグラ／＼するほどシヤクにさはつた、君はなんといふCredulousな馬鹿な人間だらう。「第一」と書いたところは実に俺を馬鹿にし俺を侮辱して居る。君の理解の乏しい性格の致す所とは云へ俺は実に憤慨に堪へない。君はよくあんな失敬なことを書いて筆を持つ手が曲らないね、実際俺をこんなにした上にあんな誤解なんかをやるとほんたうに罰が当るぜ。

——君の口から出たことも、君の心に思ふたのも共に合はせて——とは何と云ふ失敬な言葉だ、君は何の根拠があつて此んな失敬な言葉が吐けるのだ。

俺は君に断言する、あの事件に関して俺は少しも恥ぢるところ

はない。俯仰天地に恥ぢないはもとより君らが信じてゐる融通のきかない神といふ奴に対しても恥づる所は少しもない。君はどんな事を誤解してゐるか俺には分からないが、どうせ君のやうなケチな人間の推測だから相場は知れてゐる、君のやうな怖しい利己主義を道徳や信仰で包んでなるべくウマク世の中をゴマカシテ渡らうとする手合には俺のやうなsupemoralな人間のやることは分からないだらう、だから我身に引き較べてケチな誤解をやるのだらう。まあ君の誤解を分類すると。（一）あの事は俺とSとの共謀であること、若しくは俺自身の独立行為（二）俺が君に話したのは君を手先に使つて学校に訴へて俺が助からうとしたこと。

此の二つ位が落だらう。

（一）の事実は弁明する迄もない、若し君が少しでもお疑ひ遊ばすならいつでも歴然たる証拠品をお目にかけるべし。それがお嫌なら久米にでも石原にでも問合はして見らるべし、此の兩人へはもとより僕は云はねども自然と真相を知つてゐるから不思議さ。

（二）又俺が自分の身を助かるための手段ならなぜ谷山に再問せられたときに真相をあかさなかつたか。

君の誤解は何だか知らぬ。どうせ谷山か誰かにウマク説きつけられ軽信し誤解することに巧みな君はウンさうかと俺を疑ひかけたのであらう、俺の態度にあきたらぬとは一体何処があきたらぬのだ、そんな乙な物の言ひかたをっしないで明瞭に云つたらどうだ。

——浮草や今日は向の岸に咲く。と君のやうに朝には俺の言葉に

絶対の信を置き、夕には俺に怖い誤解を投げかけるやうぢあ俺はかまはないが男子たる君の面目は一体どうするのだい、然し君子は豹変すると云ふから君を咎めるのは野暮かも知れない。

然し始は俺の言葉に絶対の信ををいていらぬお世話をやきながら俺に大損害を負はずと今度は俺を誤解して俺に落度があるやう思つて自分の責任を逃れるのは実に賢いやり方だ、君は俺より役者が一枚上だよ。

ともかくも自分勝手な誤解だけは止して呉れ、俺が君に告げたのを俺が助かるためにやつたと云ふやうな誤解だけは止して呉れ、そんな失敬な誤解をしないとほんとに罰が当るぜ、俺は君に告げたのは君をもつとエライ頼みになる人間だと誤解して居たからだ、学校に持ち出すやうなお坊つちやまと知つたら初から話すのじやなかつた、君に告げたのは俺が一生の不覚、実に俺は君を見損じた。

外に誤解があるのならどうか具体的に云つて見ろ、絶交する前に誤解だけとはいって置きたい。ともかく君のシムプルな頭では俺は分らない。君は意志と感情とが発達して居るのみで理智が欠けて居る上に本当の自覚がない。君は下らない聖書なんかよして講談本でも読んで常識を養ひ給へ。

今度の撰科の事でも君には何の尽力をたのまうとは思つて居なかつたし第一君にやられると危険で仕方がないから此方から御免を蒙るところでおつた、どうか之からもどうか俺の事はかまつてくれるな。佐野の意気地なしは君に熱湯を吞まされながらまだ君に何か頼んださうだ、それで君は佐野に対する責任は帳消しになつたつもりだらう。お目出度い話だ。

君はともかく自惚が強いよ、プラウドだよ。君のやうな剛情な人間はすこしは自分を反省すると薬になるんだ。

君は今度の卒業だつて少しは俺やSの恩を蒙つて居るだらう、二年の二学期の君のザマは何だ、まるで悲観してしまつて試験を受ける元氣はなかつたじやないか、あの時に慰撫し励したの俺とSでなかつた「か」。殊に君はあの時の岩元さんの試験を忘れたのか、まさか呑気な君でも忘れては居ないだらうよ。

人はあまり威張るものではないよ、あまりに正しきを誇る勿れだ。君が友を得たと云つて一人で喜ぶのはいゝさ、俺の光明のためにつくす友を得たと云つてそう嬉しがつて貰つては困るよ。俺はまだ他人のお情や同情によつて生きるほど落ぶれては居ないんだから、殊に君とか君の友達などと云ふいはゆる正しき連中から同情されたりするほど苦痛なことはない。それから愛するとか何とかあんな安価な言葉を挨拶代りに乱用するのはよして呉れ、俺は君に愛された、めに一生を棒に振りかけて居るのだ此上愛された「ら」命があぶないや。君が独りで絶交することを決心したことがあるのなら勿怪の幸だ、下らない文句を並べないでどん／＼絶交して呉れたまへ。君に愛される心配がなくなる俺もホツとするから。

まあ井川君にウンと感化され給へ、君の法科行きは全く賛成だよどうか、検事になつて罪人を極刑に処して所謂正を行ひそして君の所謂愛を行ひたまへ。その方が国家の爲めに非常な利益だよ。なんでも自分と性格が違つたり思想が違つたりする奴はどん／＼悪人だと断定し給へ、そして自分がやつて居ること思つて居ることは最善だと思ひ給へ。まあ悪くまれ口は此位に

して置かう、俺の人格が嫌ひだと云ふのなら仕方がない、あの事件に対する俺の態度に、やまし。所、疑は。しい。所、あきたらぬ所があれば正々堂々と面責したまへ。いくらでも証拠物件をでも提供して弁解するから。ともかく自分の住んで居る地球の側にのみ人類が住んで居ると思ふと大きな間違だよ。まあ君の返事が来なければ俺と君のけんかは之で終りであらう。此の上はお互に社会に出てから後の戦だ、俺の息のあるうち社会に於ける君のやうな人間と戦つて行くつもりだ。

此間も佐野がフアターを避けた時に君は「佐野は良「心」の呵責に堪へないで自殺しに行つたのだらう」と云つたそうだがね、君はこんなことを云つて自分で自分の心が怖しく思はないかね。君は愛とかなんとか云つて居るが、自分がクリスチアンであらんがために愛すると云つた愛し方は利己主義の愛だ、自分の修養のために人を愛してそれで愛だとか何とか云つて居る奴の気がしれない。

君は倉田の生活批評を見給へ、そして君や矢内原君などと違つた一種のまじめさがあるのをしりたまへ、君は矢内原よりも真面目ばかり進んで居て反省がちつともないんだから始末に困るんだ。どんなに鉄の箱が堅くたつて中が石ころじや全く仕方がないからね。まあ他人の行為が分らなくなつて誤解だけはよしたまへ、世の中には君よりもつと明快な理解と真の愛とを以て行動して居る奴が居ないとも限らないからね。

ともかく理屈は抜きにして俺が撰科がだめになりそうなのも佐野があんな不名誉を負はされたのも一に君の愛の致すところだ、之はある僕ら友人以外の人の公平な批評であつた。俺はS

の馬鹿くしさも腹が立つが君があんな怖い打撃を与へながらケロリとすまして居るのが世界何よりシヤクだ。自分を悪いと思へない心之は悪魔だ。キリスト教のエピソードに自分が正しいくと思つて居た奴は天国へ行くのが一番遅れたそうだが、思へば君も呪はれた人間だな。之から検事にでもなつたら少し気のむかない奴はどんく死刑にしてそして正しいことをしたと思つてすまして居たまへ。

いよく撰科が駄目であつたら茲の家に居られぬし故郷へも帰れないし俺は此の身体を携げて放浪の生活に入るつもりだ、木賃宿や、椽の下のねざめには君を恨んでやるから。

ともかくも君が此の件に干渉したのは自己の修養のためと云ふやうな下らない理由だが俺たちには怖い生存問題であつたのだ。之からも自分を過信するな、乃公動けば何でも出来ると思ふやうなその自惚がいけないのだよ。

俺は之で手紙を終る。悪くまれ口を思ふ存分云つたのでいくらか気がまぎれた。「あ、余は長崎と云ふ人を友としたことを衷心より後悔する、あ、彼に満腔の信用を置いたことを後悔する、彼に真を語つたことを後悔する、あ、子供にはおもちやの刀を渡して置けばよかつた、此の意味に於てSは俺よりもエライ」。あ、万事は既に終つた。然し俺はいつまでも恨み得る特権がある。俺は最後に一言する。俺は彼の事件に關しては寸毫もやましきところなし、たゞ君に真相を告げしことを終生の恨事とす。

まあ事実上友人二人を滅茶にして自分一人ケロリとして進んで行く君はエライかな、真にエライかな。 終り。

後半は罵倒に近い。引用を憚る思いすらする。それだけ率直に、感情の高まるままに認めた手紙である。菊池としては、自分の犠牲で十分で、佐野への事件の普及はできるだけ食い止めたかったであろう。後年の常識人菊池寛からは想像もできない、感情の高ぶりを示した手紙である。また、この手紙からは長崎の揺れた気持ちも伝わってくる。

菊池寛と佐野文夫の間には、同性愛があった。成瀬正一の「成瀬日記」にも、それは明かされている。また、二十年ほど前、菊池の高松中学校時代に渋谷彰という下級生と熱烈な同性愛に陥ったことを示す手紙が多数が見つかり、杉森久英『小説菊池寛』（中央公論社、一九八七・一〇）に紹介された。異常ともいえる渋谷彰への愛の便りを読むと、一高時代の佐野文夫とのかかわりも、同性愛の感情抜きにはあり得なかったことが想定されるのである。江口渙は「菊池寛は同性愛のために学生としての前途を惜しみなくささげたのであった」（『わが文学半生記』青木書店、一九五四・七）と書いているが、それと決して決するはずとは言えないのである。

長崎の直訴によって事件の真実は、学校当局の知るところとなった。それだからこそ、佐野の父、佐野友三郎が山口から呼び出され、文夫には休学という処置がとられ、東京を離れることになる。愛する佐野がいなくなる、それは菊池寛には、やり切れないことだったのだ。

他方、佐野は東京を去るに際して、以下のような走り書きのメモを東京駅に見送りにきた長崎太郎に手渡している。これもご遺族の長崎陽吉氏が保管されているのを見せてもらったので、陽吉氏の了承のもと、以下に書き写す。

長崎君

凡べてハ夢と忘れてくれ給へ。只どうか僕について偽らない心を認めて忘れて下さるやう、菊池を許して下さい。菊池ハ君を恨むのである。どうか彼の言は、いかに君のハートを傷けやうとも、どうか目をつぶつて忍んでくれ給へ。僕ハしばらく山に入つて石を研いで考へやう。多分秋にハ君とも会へるだらう。そう信じやう。寮にも何にも何の運動もやつてくれるな。之が僕にとつての最大の好意だ。君の幸福を祈る。

十三日急ぎつゝ、佐野生

佐野文夫は本質的にはやさしい人間であつたようだ。ただ、意志が弱く、弱点を見せまいと見栄をはつたり、嘘をついたりするところがあつたのである。「長崎日記」には、佐野にドイツ語を教わりに行つての感想が記された箇所がある。一九一三（大正二）年三月十四日の記事だ。そこには「昨夜佐野君の下宿へ独逸のわからぬ所を質問にいつた。佐野君は丁寧な教へてくれた。絵の事や何か随分長く話して帰つた」とある。佐野は決して人を進んで騙すような男ではなく、自己防衛のために、非常識な行動に出る人間であつたに過ぎないのである。それにしても、菊池寛は一高という超エリート校の卒業を、佐野のために棒に振ってしまった。後年、菊池寛は「半自叙伝」に、退学以後のことを次のように書く。

自分は、出鱈目をして危い淵に臨みながら、物事が運よく発展して行つたのは、偏へに成瀬父子の好意であつた。また、成

瀬の家に、寄宿したについては、成瀬夫人の親切は、今も忘れがたいものがある。彼女は、純日本式な女性で、その上仏教の信仰がふかく、親切でよく気がついた。自分に対しては、その愛児である成瀬の友人として、よく面倒を見てくれた。「大島が出来る話」は、この夫人の死を書いたものであるが、自分の一生を通じ、常に感謝の念を以て、想ひ出されるだらうと思ふ。

一方、長崎太郎は「菊池君の退学」に、事件の後日譚として「私は京都で法学部に在学中、いつであったか菊池君に会った折、同君は「やっぱりあゝしておいて貰ったことは良かった」と言ってくれたことがある。しかし、その時も私はたゞホッとしたような気持ちにはなれなかった。菊池君の貴い犠牲に背いて、誓言を破って行動したことに對する、一抹の心さみしさを抑えることが出来なかったからである」と記している。この記事の裏付けは、「長崎日記」の出現によってとれるようになった。一九一四（大正三）年二月十一日の「長崎日記」に、「菊池が夜訪ねてくれた。自分は誠に自分のなした事についてゆるしを求めた。そして友として此の後もつきあつてくれる様に願つた。彼は今はもうそんな事は思つて居ない。そして京都へ来た事は自分の為めにもよかつたと云つていた」（一九一四・二・一一）とある。

菊池寛の退学事件の張本人佐野文夫は、長崎太郎の直訴によつて、事件の真実が学校側に知られたため、卒業試験は受けられず、謹慎することになる。瀬戸虎記校長の配慮もあつて、反省が十分ならば卒業させるといふ含みで、父に伴われ帰郷、山口県の秋吉台で不良少年の更生に尽力していたキリスト教信徒伝道者本間俊平の下、大

理石の採掘をしながら悔悟のひと夏を送った。本間は秋吉台の聖者といわれた人物である。

先に記したように佐野文夫の父友三郎は、山口県立図書館長の要職にあり、熱心なキリスト者だった。文夫も弟たちと日曜学校に通つたものの、信仰に背く生活の連続であつた。父は息子の将来に、このころから強い不安を抱くようになる。後年の友三郎の悲劇は、一高時代のマント事件にきざしていたのである。佐野友三郎が長男文夫の将来を思つて、秋吉台の本間俊平の下にやつたのも、何とか信仰を取り戻し、正常な道を歩んでもらいたためであつた。付言するなら現在山口県文書館に収蔵されている「初代山口図書館長佐野友三郎・文夫・きみ書翰」には、本間俊平宛の友三郎や文夫の便りを見出すことができる。

佐野文夫は仲間が遅れてこの年九月十九日、一高を卒業した。長崎太郎に宛てた佐野の便り（一九一三・九・二六付）の一節に「十六日急電に接し、十八日上京」「一九日」上田「萬年、佐野友三郎と大学同期」先生と校長室に参り 卒業証書授与され候 小生も 漸く 外面的に 一人前になれてうれしく 之も貴兄御配慮のためと 忝く感謝致し候」とある。

多くの人々の配慮で佐野は一高をとまかく卒業し、大学は東大の哲学科（前稿「研究余滴 芥川龍之介周辺の人々①長崎太郎論（上）」において、「独文科」としたのは誤りなので、訂正する）に入った。秋吉台での石切りの激しい労働生活を経て、佐野文夫は一時的に立ち直つた。右の長崎宛て便りには続けて、「父も母も その夜は眠らず まことに 生まれて初めて「愛」の いかにも 強く 聖きものたることを経験致し候 これよりは ゆめそむかざらむ 父母も 本間

氏も 先生も 悉く小生を励ましくれ候 さらば 甦りたる力もて 新しく 努力と 祈念の生を拓かしめよ 静かに眼閉づれば 暖かき雨の降るごと わが心に 神の思ひのたのしみあり 願はくは 前途を祝し給へ」との希望に燃えた文面を見出すことができるのである。

新しい下宿は本郷追分の栄林館で、主人は文学士の牧師であつた。父の特別見立ての下宿である。大学は当初佐野には希望あふれるところに見えた。一九一三(大正二)年九月二十九日付の長崎太郎宛書簡では、「小生も 毎日勉強致しおり候 毎日 帰るのは五時過ぎにて可なり忙しく 今よりせば 高等学校時代を 何故遊び暮らせしかと 後悔致し候 されど後悔も詮なきこと むしろ一倍努力して 償い致すべく」とある。さらにこの手紙では、父の勧めで、教会に出席することをも伝えている。以下のようなうだ。

父より 教会にゆけ と云ひ参り候 小生は 教会は大の嫌ひにて むしろ孤りにて自ら生へし芽も 茲にては摘まるゝ如き心地致し候へども 父の安心のためならば是非なし 今度の日曜より 教会に参るつもりにて候 何処にせんかと迷いおり候へども 海老名、内ヶ崎氏の思想は たゞあれだけにて 奥に何物もなき心地致され候 小生は むしろ「思考」によりて得たる説教は 現代の 日本にては 吾人青年を感化するだけの思想家なければ 断念せざるを得ず 思想の内容よりも その思想の出づる「人格」をこそ欲し候へ 之について思い出づるは 貴兄より送られし パスカル「思想録」中の一章にて候 宗教の心理を説くに 二つの方法あり 一は 理の力によ

りて

他は 説く人の権威によりて

今 前者は多けれど 後者に至りては絶えて無きなり

小生は 父の命にあらざりせば 一生教会には入らざるつもり候ひしも 今は 詮なければ 悦むで教会の善きところを取らむと考へおり候 昨夜 主人今岡氏とも相談致し候処 やはり小生と同じことを申され候 この時 忽然として小生の脳裡に浮かび出でたるは

それは学者の如くならず 権威を有てる者の如く教へたまへば也

馬太、七、二九、

の一句にて候 さらば 小生は 権威を有てる者の教へなる聖書に読み老ふることの最もよきを考へざるを得ず

雨ふりおり候 雨ふれば心落着きて 何くれとなく 色々のことと思ひ出され候

佐野文夫の父友三郎は、明治の典型的プロテスタント信仰の持ち主であつたようだ。禁酒禁煙は無論のこと、聖書をよく読み、こどもたちの教育にも熱心であつた。また、図書館学者として理論と実践にすぐれた業績を示していた。当時から先進諸国の図書館事情に学び、新しい方法で公共図書館の活性化を図つた。先にも記したが、日本の公共図書館史をひもとくと、彼の名は大きな存在として残っている。その人柄を彷彿させる長崎太郎宛書簡がある。長崎が友三郎の子息、文夫が謹慎処分にされたのは、自分が学校当局に訴えた

ためであると告白した便りへの返事と思われる。封書 T.SANO  
LIBRARIAN Yamaguchi Japan の用箋を用いている。一九一三（大  
正二）年九月二十八日付で、消印は九月三十日になっている。

拜復 廿六日の御挨拶 却つて痛み入り候

爾曹互ひに容忍をなし、若し人に責むべきことあらば之を  
恕せ、

キリスト爾曹を恕し給へる如く爾曹も然すべし 哥羅西二  
ノ一二

況んや我等始めより君を責めず 今更何ぞ之を恕すと云はんや。

彼は唯其の種きたる所のものを 自ら獲りたるのみ。君若し心  
に釈然たらずと思はば 請う 哥林多一三章を読み 五三番を

歌へ 愛の神は一切を包容して遺す所なし。

彼は今や恕されて旧衣を脱し 新人の馳場に上りたれば 願く  
ば Whiter than Snow にも歌いつ、 相共に道に進まん。

萬事は皆爾曹の益となれり 羅馬八ノ二八

君よ 何事もついに至善に帰着すると信じて 一切顧慮する勿  
れ。唯念々忘るべからざるものは 君が故山の双親なり。草々

拜復

明治のプロテスタントキリスト者の面目を示す手紙である。我が  
子を思いやり、その友人にキリストの愛を称え、両親に感謝すべき  
ことを説いている。

秋吉台の大理石切りに較べ、大学は佐野文夫にとって天国であつ  
た。好きな科目はいくらでもとれる大学の課程は、当初彼には魅力

的に見え、「大学は全く自由にして ご存じの如く いくら時間を  
とりても宜しく 小生は四十二時間を正課と致し候」（長崎太郎宛、  
一九一三・九・二六付）などと、その便りに記している。

大学に入って間もない一九一三（大正二）年の秋、第三次『新思  
潮』刊行の話が山宮允と山本有三を中心とした仲間から起こり、佐  
野も同人として参加することとなる。菊池寛の一高退学事件の真の  
理由が佐野の盜癖にあったことは、このころには知れ渡っていた。

そればかりか芥川書簡に、「（成瀬は）時計を九月に佐野にかしたの  
がかへつてこないと云つて悲観してゐる、（中略）久米は月謝を佐  
野にかしたのがかへつて来ないと云つて悲観してゐる」（井川恭宛、  
一九一三・一二・三付）とあるように、大学に入って再び踏み倒しを  
発揮しはじめていた。しかし、その頭脳の抜群さ、『第一高等学校  
校友会雑誌』時代の切れ味鋭い論文は、依然仲間の注目を集めるも  
のがあった。それだからこそ十名の同人の仲間になを連ねることが  
できたのである。

第三次『新思潮』は、翌一九一四（大正三）年二月十二日に創刊  
号が出る。佐野は創刊号に「生を与ふる神—生命論三部作の一—」と  
いう評論を載せた。佐野の『新思潮』に寄せた作品は、本作一編の  
みである。先に紹介した『第一高等学校校友会雑誌』第二二七号  
（一九一三・六・一五）に、佐野が寄せた「神の発見の過程」という若々  
しい感性あふれる論は、多くの学生の注目するところであったが、  
創刊号のこの論文もまた、純な魂の叫びといったところがある。し  
かし、美しい文章で、生や死や神に思いを巡らせた論は、どこか表  
面的で強く訴えるものがない。芥川龍之介は創刊号の感想を山本喜  
營司への手紙（一九一四・二・二九付、全集は一九一四・一・二九推定）

で、「久米の戯曲と豊島の小説はい、でせう 佐野の論文も今度の  
は空疎なものです 山宮の象徴論の方がい、かもしれませぬ」と評  
している。ちなみに久米の戯曲は「此の諫言お用ななくば」、豊島  
の小説は「湖水と彼等」、山宮の象徴論とは「本質美の表現として  
の象徴」である。ジャンルは異なるものの、どれもが一応の合格点  
のつけられる作品であった。

佐野は『新思潮』に、この一編の論文を残して消えて行く。『新  
思潮』五月号「消息」欄を見ると、「佐野は都合あつて同人をよし  
た」とある。同人をやめたばかりか、大学を退学したのである。

佐野文夫のよくないうわさは、京都の大学に移った一高卒業生に  
も及んでいた。「長崎日記」の一九一四（大正三）年一月十四日の記  
録に、「学校で井川君から佐野の事を聞いたが、八木君からも又佐  
野の事を聞いた。進まんとしても進み得ず、行かんとしても四周の  
事情や何かの爲めに足枷をかけられるのは人間の常だ。自分はもつ  
とも佐野をとがめる程よき生活はして居らぬ。然し佐野は嘗て将来  
の事に就てあれ程にまで深い決心を示したのに、人は弱い、人は弱  
い、決して強いものではない」とある。どんなことを佐野がしでか  
したかは、「長崎日記」は記していない。芥川龍之介の一九一四  
（大正三）年四月二十一日付井川恭宛書簡は、佐野文夫の大学退学の  
模様を次のように記している。

佐野はほんとうに退学になつた 何でも哲学科の研究室の本か  
何かもち出したのを見つかつて誰かになぐられてそれから退校  
されたと云ふ事だ 卒業の時のいろんな事に裏書きをするやう  
な事をしたから上田さんも出したのだろ 其後おとうさんがつ

れに來たのを途中でまいてしまつて姿かかくしたさうだが又浅  
草でつかまつて東北のおぢさんの所へおくられたさうだ かは  
いさうだけど仕方がなかる あんまり思ひきつた事をしすぎる  
やうだ

何度も書くが、佐野文夫は決して根っからの悪人ではない。右の  
「生を与ふる神」には、それなりの求道の精神が十分認められるし、  
先に引用した長崎太郎宛書簡も、新しく生きようとする願いに満ち  
たものであつた。ただ、繰り返すが、彼は性格が弱かつたと言わざ  
るを得ない。一高南寮のデカダンスな雰囲気もよくなかつた。多く  
の寮生は通過儀礼として、やがては情熱は建設的方面（創作など）  
に發揮されていくのだが、佐野の場合はそれがうまく機能しなかつ  
たのである。彼はいつまでも純粹なところを残した子どもであつた。  
その純粹さがやがて社会主義運動と結びつく。

佐野文夫は大学中退後、父の世話で山口県の私立中学の教師をし、  
一九一八（大正七）年には、大連満鉄の調査課図書館に就職する。一  
九二二（大正一一）年には、外務省情報局に移るが、次第に社会主  
義に目覚め、非合法運動に接近する。父はそうした息子の行状を、  
従前からいたく心配した。マルクス主義の台頭してきた時代である。  
ここに一つの悲劇を書き留めねばならぬ。それは息子の素行ぶり  
に悩んだ父、図書館学者佐野友三郎の自死である。純粹ながら芯が  
なく、常に回りの状況に支配され、極端なことに走りがちな息子は、  
父の最大の気がかりであつた。厳格なクリスチャンの父は、息子の  
社会主義への接近を心配し、神経に異常を來たし、一九二〇（大正  
九）年五月十三日、山口の自宅で縊死して果てるのである。わたし



は恒藤恭がニューヨーク滞在中の長崎太郎に宛てた書簡（一九二〇・八・一四付）を手がかりに、長い時間をかけて当時の新聞に当たった。恒藤の太郎宛便りの中には、「君は知つていたかどうか知らないが、佐野のお父さんはこの春の頃自殺されたと、新聞に出てゐたよ。気の毒だね」とある。わたしは恒藤恭のいう「この春の頃」が、一九二〇年春に当たるとして、徹底的な調査を行った。マイクロフィルムで新聞数紙に目を通す作業は容易ではない。該当記事はなかなか見つからず、いったんはあきらめたが、時をおいて国立国会図書館で再調査をした結果『東京朝日新聞』の社会面に当該記事を見出すことができた。わたしは『評伝成瀬正一』（日本エディタースクール出版部、一九九四・八）にはじめてこの記事を引用した。

本稿の読者の多くは『評伝成瀬正一』を読んでいないと思われるので、ここにもその全文を引用する。同年五月十五日の『東京朝日新聞』は、佐野友三郎の死を「図書館学者／自殺す／現山口県立図書館長」との見出しで、つぎのように報じている。

山口図書館長佐野友三郎氏（五）は十三日午前八時より九時迄の間に神経衰弱の為頓死せりと伝へらるるが事実は同日午前八時夫人を病院に遣はし雨戸を締め机の前にて小刀を以て咽喉部を突きしも死に切れず縁側の梁に細紐を吊し縊死を遂げたるものなり氏は

全国唯一の図書館学者にして山口県庁に奉職する事十七余年の長きに及び百余の図書館を有し教育界に貢献する事多大なり未だ喪を免せず原因は病気を苦にしたるにより家人も平素より注意し居りしと遺書は前警視總監岡田文次澤柳博士田中稻城氏

ら七通、最後の一通には家人が刃物を隠したるより見苦しき縊死を遂ぐ旨記せり（山口特伝）

新聞報道は「病気を苦にして」とあるが、実際は息子文夫の行跡に悩まされ、神経を痛めての自殺である。図書館学者として華々しい活躍をした良心的知識人としては、気の毒な最期であった。遺書の宛て主として最初に書かれている前警視總監岡田文次は、非合法時代の社会主義運動に走った息子を思い、よろしく頼むとでも書いたのだろうか。澤柳博士とは東京・京都両大学総長を務め、のち成城学園を創設した澤柳政太郎、田中稻城は明治・大正期の図書館学者である。

不肖の息子文夫は、外務省情報局を退職後、著述や翻訳で何とか生活していたが、やがて社会主義者として頭角を現す。そして非合法時代の初期日本共産党の中心人物として、党史に名を残すのである。以下簡単に判明している事実を摘記するならば、一九二二（大正一）年、市川正一・義雄兄弟、青野季吉、平林初之輔らと雑誌『無産階級』（『赤旗』の前身誌の一つ）を創刊、同年七月十五日の日本共産党創立に参加する。父の死後二年のことである。同党がきびしい弾圧の中で、一九二四（大正三）年二月にいったん解党すると、残務整理事務局に残り、翌年佐野学・荒畑寒村らと上海会議一月テーゼを作成、一九二六（大正一五）年十二月四日、山形の五色温泉で開かれた再建共産党大会では、何と中央委員長というトップの座を占めることとなる。

『日本共産党の七十年』（日本共産党中央委員会出版局、一九九四・四）には、「一九二六年（大正十五年）十二月四日、山形県五色温泉

(宗川旅館)でおこなわれた日本共産党第三回大会は、党を再建し、政治方針と党規約を採択して佐野文夫、佐野学、徳田球一、市川正一、渡辺政之輔、福本和夫、鍋山貞親からなる党中央委員会を正式に選出し、党のあらたな前進のためのいしずえをおいた。委員長には佐野文夫がえらばれた」とある。かくて佐野は人民のためにとばかり、政治活動に熱中することとなる。委員長後は政治部長という要職をこなし、一九二七(昭和二)年三月には、党を代表し、ソヴェトを訪問している。

が、純粹ながら生来性格的に弱さをもった佐野文夫は、福本主義への態度をめぐり、首尾一貫性がないことを批判され、中央委員を罷免される。そして一九二八(昭和三)年三月十五日の大弾圧にあつて検挙されると、翌一九二九(昭和四)年、獄中で水野成夫らと共に

産党を批判、解党主義を主張して転向してしまう。獄中の拷問に耐え得なかつたのである。「佐野文夫予審訊問調書(一九二八―一九三〇)」(現代史20『社会主義運動7』みすず書房、一九六八・六収録)を読むと、佐野は東京地裁や市谷刑務所での予審判事塚田正三の訊問に応え、秘密とすべき党政治部の職務や中央部員名などを、あっさり自白している。彼はしよせん抵抗の人ではありえなかつたのである。

佐野文夫は保釈出獄後の一九三二(昭和六)年三月一日、若くして肺結核で病没した、訳書にレーニン『十九世紀末農村問題』(希望閣、昭和二・三・二八)、エヌ・ブハーリン『ロシアに於ける転形期経済学』(同人社書店、昭和三・九・一三)のほか、岩波文庫にレーニン『唯物論と経験批判論』上・中・下、ローザ・ルクセンブルグ『経済学入門』などが見出せる。